

## 報告

# ソーシャルワーク演習教育と地方行政課題のコラボレーションモデル

— 高次脳機能障害支援事業「やまぐちリハビリの会」の運営を通して —

正司 明美

Akemi SHOUJI

石原 弥生

Yayoi ISHIHARA

## はじめに

2011年4月に、山口県身体障害者福祉センター総務課長より、山口県が「高次脳機能障害支援事業」の一環として実施している「やまぐちリハビリの会」で、ボランティアスタッフを募集しているとの要請があった。学生が地域でボランティア活動を行うことは、ソーシャルワーカー養成教育現場においては、大いに奨励していることでもあり、好機であると捉えた。しかし、昨今の学生は、ただボランティア募集をただけでは、主体的な活動へと発展することが困難であるという実態がある。つまり、一定の仕掛けやお膳立てが必要であることを実感していたからである。

そこで、本学の特色として実施しているソーシャルワーク演習のプログラムである「プログラム企画演習」の課題として取り組むことの可能性について、実際に「やまぐちリハビリの会」を中心者として担当している、山口県身体障害者福祉センター職員で作業療法士でもある石原弥生主任と検討した結果、両者の課題達成目標が一致したので、コラボレーション教育として実施することになった。

本報告は、地方行政の取り組み課題の解決と大学教育課題の解決を目標としたコラボレーションモデルとして、2011年度から2012年度の2年間の活動実績としての報告である。執筆は、正司が、「はじめに、項目1～3及び項目8～9、おわりに」を、石原が「項目4～7」を担当した。

## 1. 社会福祉士養成における「相談援助演習」の位置づけ

社会福祉士養成における社会福祉援助技術を学ぶ演習教育は、2007年に改正された「社会福祉士及び介護福祉士法」において、大幅な改正があり、2009年4月から新カリキュラムとして施行された。演習教育は、科目名称を「社会福祉援助技術演習」から「相談援助演習」として変更し、時間も2000年の改正から30時間増加し、150時間となった。新たに示されたシラバスの内容は、そのねらいに「相談援助の知識と技術に係る他の科目との関連性も視野に入れつつ、社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、次に掲げる方法を用いて、実践的に習得するとともに、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てて行くことができる能力を涵養する。①総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげる。②個別指導並びに集団指導を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイング等）を中心とする演習形態により行うこと。」（社団法人日本社会福祉教育学校連盟ほか、2008）と明示された。このことは、大学や養成校において、演習が理論と実践を結びつける実践的な科目として位置づけられ、高度な実践力をもったソーシャルワーカーを養成するためにも、重要な科目として、その内容を発展させる必要があることが問われていると考える。

## 2. 本学のソーシャルワーク演習教育と「プログラム企画演習」の内容

本学の教育の基本理念は、「人間性の尊重」、「生活者の視点の重視」、「地域社会との共生」、「国際化への対応」であり、地域の要望に応えることができる「地域貢献型大学」としてその存在を示している。社会福祉学部は、これらの大学理念を基盤に、学部としての理念を「地域社会における多様な福祉ニーズに対応できる広い視野と専門知識を有するとともに、福祉に関する問題解決に向けた実践力を兼ね備えた人材の育成を目的とする」と掲げている。

本学の演習教育は、実習教育と併せて、社会福祉士養成を始めた当初から、これらの理念を意識した教育内容として充実させるべく鋭意努力してきた。教育指導体制としても、複数の指導教員による「実習会議」という組織的な演習・実習教育を実施するとともに、履修希望100名程度の学生を、15名程度のグループに分け、少人数教育を徹底している。その意味では、全国に先駆けた教育を展開してきた自負がある。社会福祉士としてのスキルを習得するために、面接技法や疑似体験、地域や社会福祉施設の利用者との交流体験などを実施してきたが、中でも本学の特色でもある「プログラム企画演習」は、企画力やグループワーク技術を醸成することを目標に、重要な演習教育プログラムとして位置づけ、現在に至るまで一貫して実施してきた。

本学ではソーシャルワーク演習及び実習教育が始まる2年次に、学習資料として配布している「ソーシャルワーク実習ハンドブック」(2009年度までは「社会福祉実習の手引き」)に、プログラム企画演習の学習目標について、次のように記載している。

「プログラム企画演習の学習目標は、実際のプログラムの企画・実施の過程を通じて、地域の福祉課題を把握する方法やネットワーキング、社会資源の活用・調整・開発、アウトリーチ、集団を活用した支援、チームアプローチに関する方法・技術等を身につけ、具体的なソーシャルワークの

展開の方法について体験するプログラムです。またリーダーシップやフェローシップを養うことも必要です。さらに、活動の場は地域であることから、地域の状況を把握しながら地域の人々や活動団体と関わる体験を通してコミュニティワークの実際を学ぶことにもなります。地域社会の構成員であるということを体感し、社会性を養うことも必要です。」(山口県立大学社会福祉学部、2012)。

2012年度に実施しているプログラム企画演習の内容は、以下の8プログラムである。なお、演習内容は、数年ごとに地域課題の状況に合わせて変更している。

- ①桜島地区の老人クラブとの異世代間交流  
～高齢者の生活の理解と高齢者の住みよい地域の創造～
- ②地域の子育て支援のあり方を考える企画
- ③地域の社会資源を活用した余暇支援プログラムの共同企画
- ④障害をもつ人とタンデムに乗って風を切って走ろう  
～地域の視覚障害者団体とのタンデム使用の交流～
- ⑤地域課題発見プログラムの共同企画
- ⑥高次脳機能障害の当事者及び家族の会“やまぐちリハビリの会”におけるグループワークプログラムの企画実施
- ⑦メイクセラピーを活用して地域活動を支援する
- ⑧地域の人々と学生のための災害に備えた活動  
～地域の人々と学生のために災害に備えた啓発活動や災害時のボランティア活動について学ぶ～

プログラム企画演習全体の授業日程としては、6月上旬から7月上旬にかけて、90分授業二コマ連続で9回実施され、その成果として全体でグループごとに発表し、終了することになっている。但し、企画演習の実施対象が地域住民や地域機関となっているため、夏休みや大学祭において本番実施となるグループもある。その意味から実施報

告会は、中間報告として位置づけられている。

### 3. 企画演習「高次脳機能障害支援事業『やまぐちリハビリの会』プログラム企画実施」の授業内容

企画演習「高次脳機能障害支援事業『やまぐちリハビリの会』プログラム企画実施」は、2011年度から実施しているが、「やまぐちリハビリの会」の開催が予定されている年6回実施のうち、9月に開催される会のプログラムを担当して、実施してきた。表1は、準備から実施までの2012年度の授業プログラムを示したものである。

本グループを希望した学生は、2012年度は14名(2011年度は15名)であったが、このうち、リーダーとサブリーダー及び会計担当を互選した。企画演習の学習目標の一つがリーダーシップやフェロウシップを養うことであるため、極力、学生主体の授業展開になるよう、全体を通してリーダー、サブリーダーを中心に進めるための意図的指導を行った。また、前述のプログラム企画演習の学習目標やねらいについては、石原作業療法士と綿密な打ち合わせを行ったことで、指導上でも、学生の主体的な発想や行動を促す的確な配慮を得ることができた。

表2は、9月9日に実施した、学生の企画プログラムの内容である。当日は、午後からの実施であったが、午前中は、スタッフとして参加した専

門職や他大学等の学生、県立大3年生を交えて、セクションごとに担当メンバーを決め、それぞれのゲームのねらいや配慮すべき内容等を協議し、材料の準備作業を行った。また、参加当事者の障害の程度や配慮すべき内容など、個別の情報確認事項を行った。これは学生にとっては、グループワークの援助技術としての“波長合わせ”の実践演習となっていた。

本番では、オリエンテーションから終了に至るまでの全てのプログラムをリードし、全体の進行も責任を持って取り組んだ。開始当初は、緊張した面持ちの学生もいたが、担当プログラムが進んで行くにつれ、積極的に当事者に声かけをしたり、ゲームの流れを確認したりしながら、自分の役割を認識した行動をとることができていた。日頃、内向的だと思われる学生も、当事者にさりげなく声をかけ、材料を手渡している場面など、当事者が主体となれるよう配慮している様子を垣間見ることができた。また、2012年度は、特に注目することとして、2011年度に本演習に取り組んだ3年生3名が、スタッフとして参加し、2年生を側面からサポートしている様子が全体を通して見られたことが挙げられる。3年生が、今年はスタッフの立場から、今年度の主体である2年生を尊重しながら、ゲームの進行状況、当事者への配慮状況など気にかけている様子が印象的であった。

#### 事前準備の風景から



ゲームの入念なチェック！



簡単すぎず難しすぎず！

表1 2012年度授業プログラム

回数	日程	
1	6/4 (月)	企画演習プログラムのガイダンス (大学にて)
2	12:50~13:30 14:00~15:30	石原弥生作業療法士による高次脳機能障害理解についての学習指導 (講義及び演習) (身体障害者福祉センターにて)
3	6/11 (月)	石原弥生作業療法士及びセンター所属社会福祉士による高次脳機能障害の特性とグループワーク指導
4	13:00~15:30	(身体障害者福祉センターにて)
5	6/18 (月)	学生主導による本番実施プログラム案の検討
6	13:00~15:30	(身体障害者福祉センターにて)
7	6/25 (月)	前回検討したプログラム案について深める。(大学にて)
8	7/2 (月)	検討したプログラム案について、石原弥生作業療法士及びセンター所属社会福祉士による指導
9	13:00~15:30	(身体障害者福祉センターにて)
10	7/8 (日)	「平成24年度第2回 やまぐちリハビリの会」への参加 対象者理解及びプログラムイメージを目的とした事前準備のためのボランティアスタッフ参加 (身体障害者福祉センターにて)
11	7/9 (月)	企画演習報告会〈全グループ〉(大学にて)
12	9/3 (月)	本番実施に向けての最終準備 (身体障害者福祉センターにて)
13	9/9 (日)	「平成24年度第3回 やまぐちリハビリの会」において企画プログラム実施 (身体障害者福祉センターにて)
	8:30~17:00	参加者 当事者 18名 ボランティアスタッフ 現任作業療法士・社会福祉士 9名 作業療法士養成大学・専門学校学生 10名 県立大学学生2年 14名 県立大学学生3年 3名

表2 企画プログラム実施日の内容

9月9日「やまぐちリハビリの会」プログラム		
13:30	オリエンテーション	(5分)
13:35	「私はだあ〜れ？」 グループ分けを兼ねたコミュニケーションを高めるゲーム	(30分)
14:05	「びったんこゲーム」 グループのみんなで考え、頭を使ったゲーム	(30分)
14:35	休憩・振り返り 休憩の間に、振り返りシートを使って、当事者個々人が各ゲームへの自分の参加状況を振り返り、スタッフからのコメントも受ける	(20分)
14:55	「ちよるるパズル」 みんなで協力しあいながら、楽しくグループの団結力を高めるゲーム (*それぞれの機能レベルのみんなが、各々の役割を担えるように工夫していく)	(30分)
15:25	表彰式・ミニ講座 得点の高かったグループの当事者メンバーへの表彰と高次脳機能障害についてのミニ講義 (作業療法士養成校学生が担当)	(10分)
15:35	マイアルバムづくり・記念撮影 スタッフが撮影した多くの写真の中から、自分のベストショットを数枚選んで貼り付け、コメントをつけてアルバムを作り、1日の自分を振り返る作業	(25分)
16:00	終了	

## プログラム企画実施本番の風景から



楽しく真剣に！



みんな注目！

### 4. 山口県における高次脳機能障害支援普及事業

高次脳機能障害は、交通事故や脳血管疾患などにより脳に損傷を受け、言語・思考・記憶・行為・学習・注意などの認知機能に障害を生じ、日常生活や職業に様々な支障を来たしている状態をいう。

厚生労働省は、2001年から5年間にわたって高次脳機能障害者支援モデル事業を実施し、その成果を踏まえて2006年に成立した障害者自立支援法において、都道府県が行う地域生活支援事業の中に、「専門性の高い相談支援事業」の一つとして高次脳機能障害支援普及事業をあげた。山口県では、2007年2月より山口県身体障害者福祉センターを高次脳機能障害支援拠点として、①相談窓口の設置、②医療・福祉・行政関係者等の研修、一般県民の方への普及啓発、③地域での支援体制の整備、を三本柱として取り組みを開始した。

運動障害のように目で確認できる障害は、周囲に理解してもらいやすいものだが、高次脳機能障害は外見では判別しづらく、周囲だけでなく本人・家族にも障害として認識されにくく「見えにくい障害」と表されている。就労可能な障害程度であればなおさらその障害は理解されにくく、医療スタッフさえも障害に気づかずに、そのまま何の支援を受けることなく退院となることが多い。しかし、退院後に職場復帰したものの、高次脳機能障害のため発症前のように仕事は捗らず、「全然

仕事ができない」「任せられない」と職場からは否定的な評価を受け、結果的に、何の支援も受けられずに経済的に困窮する状況に追い込まれることが多いのが実態である。また、その対象者も、交通事故などによる脳障害を起因とすることも多く、若年者が多いのも特徴である。若年者ゆえに抱える問題も家庭、就労、就学、社会参加、交友関係と多岐にわたり、本人だけでなく、家族が多様な問題をどこにも相談できずに抱えて悩んでいることも多い。

高次脳機能障害の支援には、このように、医学、リハビリテーションだけでなく、心理、社会生活、就労・復学という多方面での多岐にわたる継続的な支援や関わりが必要となる。総合的に継続的に支援や関わりを扱う機関は山口県内には存在しないため、救急医療からはじまり、リハビリテーション病院、訪問リハビリテーション、障害者支援サービス機関、市役所・保健所、就労支援機関、ハローワークなどの関係機関が有機的に連携し支援していく必要がある。

### 5. 「やまぐちリハビリの会」の発足

2007年から①相談、②研修、普及啓発、③支援体制の整備の事業を実施していく中で、解決していくべきいくつかの課題が見えてきた。

具体的なものとしては、相談の中からは、「同じ障害をもつ人との交流や専門的訓練をする場が

ほしい]、「家族会はあるが、当事者の対応に追われ家族だけでは話し合う時間が十分確保できず、家族だけで会合できる場がほしい」。研修、普及啓発の中からは、「高次脳機能障害者を受け入れた経験が少なく、対応方法がわからない」、「知識だけでなく、実践経験を積める場がほしい」。支援体制の整備を進めていく中では、「地域の受け皿が少ない」、「支援のネットワークに地域差がある」などである。

これらの課題を解決する一つの方法として、当事者や家族の支援グループ「やまぐちリハビリの会」を2009年9月に発足した。それまでに行われていた家族会と並行開催する形をとり、当事者と家族と同じ時間帯に別々に会を企画開催し、当事者同士の交流の場と家族同士の交流や情報収集の場を共に確保した。

当事者の交流の場では、認知課題をレクリエーションの中に組み込み、楽しみながら、気づきあい、学びあい、社会生活スキルを高める場になるよう構成を考えた。また、実践の中で知恵やスキルを身につけたいと願う支援者に、実践を積み場として「やまぐちリハビリの会」を開放し、スキルの向上を図ってもらう機会とした。実践を積んだスタッフが各地に増えることにより、地域の受け皿拡大に広がり、地域の支援体制の整備に一役買ってくれることも副産物として期待した。

「やまぐちリハビリの会」発足当初、当事者参加は数名であったが、回を重ねるごとに継続的な参加も含め参加者は増え、現在は20名程度の参加申し込みがある。年齢層は10歳代から60歳代まで幅広いが、平均年齢は30歳代と概ね若い参加者が多く、障害状況、生活状況も様々で、どこにも参加場所がなく家で過ごしている人から、一般企業に就労している人まで多様な参加者となっている。参加者の多様化、増加に比して、ボランティアスタッフは固定化する傾向にあり、ボランティアスタッフの参加者を上げていくことが一つの課題となっている。

## 6. 山口県立大学の演習授業とのコラボレーションの背景

研修会や勉強会において、ことあるごとに「やまぐちリハビリの会」の存在について周知を図り、ボランティアスタッフの参加を呼びかける活動の中で、2011年度に、山口県立大学の演習授業とコラボレーションの提案があった。

普及啓発のためには講演会やパンフレットの配布だけではなく、①「見えにくい障害」ゆえ、実践的関わりの中で障害特性の理解を促す形の普及啓発の必要性、②障害特性からくる自己認識低下や対人スキル拙劣さの向上を図るためにも集団を活用した働きかけが有効であり、そのための人材育成の必要性を強く感じていたところであり、この機会を有機的に活用したいと提案に賛同させてもらった。

山口県立大学の演習授業の趣旨と高次脳機能障害支援普及事業の趣旨と重なる部分が多く、「やまぐちリハビリの会」をコラボレーションで行う企画を演習授業担当教員と共に検討を行った。コラボレーション企画を検討する中で、最終的に、学生に何をどう感じてもらいたいのか、何を得てもらいたいのか、どう変化してもらいたいのかを話し合い、確認した。

コラボレーション企画の目的として、高次脳機能障害についての知識や理解を得ることはもちろんのことながら、対象者と関わる楽しさ、主体的に企画し参加する楽しさ、現場に出る楽しさを体感してもらうこと、それらを体験することにより「もっと知識を得たい、スキルを身につけたい、学びたい」そのモチベーションを高め、最終的には、地域でリーダーとして活躍できる支援者になってもらうことを目標とした。

目に見える成果としては、演習授業が終了後も、ボランティアとして主体的に参加してくれる学生が増えることを指標とした。

## 7. 高次脳機能障害支援事業におけるコラボレーションの意義と評価

当初、「やまぐちリハビリの会」は支援者のた

めの実践を通して学び合う場であったが、今回のコラボレーションにより、それ以外にも波及効果をもたらす可能性があることを大いに感じさせてくれた。

コラボレーション企画に参加した学生にとっての本当の成果や意義については、今後の活躍にどう結び付くか否かにより評価されるところであろうが、学びの回を追うごとに頼もしい言動が増え、企画プログラム実施本番では、今までに見せなかった堂々としたリーダーシップぶりを見せる学生が多く驚かされた。役割や責任を担う場が、学生の成長につながることをひしひしと感じさせてくれた。

学生を陰ながら支援してくれた専門職スタッフにとっても、学生の「発想の豊かさ」、「素朴で実直な関わり方」、「新鮮な感想や意見」を得ることで、専門職スタッフ自身の「固定観念への気づき」、「それによる視野の広がり」につながり、「懸命に取り組む姿に刺激を受けた」という感想が寄せられた。これらの気づきや広がり、多様な障害をもつ当事者に関わる上で、今後の支援に有効に機能していくものと考ええる。

当事者自身にとっても、同年代に近い学生との関わりの中で、友だちと接する時のような普段着の顔を見せ、「緊張する学生に気遣う」、「自分の障害について学生にわかりやすく説明しようとする」等、支援者との関わりとは違う一面を発揮し、「してもらう」から「してあげる」の役割が自然に担える場になっていた。何より、エネルギーで懸命な学生に、笑顔と元気をもらっていたようであった。

「やまぐちリハビリの会」のプログラム構成においても、学生の企画を取り入れて行うことで、今までになかった発想が取り入れられ、プログラムや進行方法にも幅の広がりが出てきた。プログラム企画終了後の全体の振り返りでは、「次回、より良いものにするには」をみんなで検討し合い、新しい気づきを得ることができた。

学生だけでなく、関わるスタッフにとって、当事者にとって、「やまぐちリハビリの会」にとって、

一粒で4度美味しい「コラボレーション」であった。

この成果は“やまぐちリハビリの会”の場だけにとどまらないと考える。山口県立大学社会福祉学部の学生の多くは、卒業後、社会福祉士、精神保健福祉士として活躍することが期待されている。病院から地域や社会に出た後、どのような支援を受けているのか、どのような生活をしているのか、生の当事者を知る機会であった今回の経験は、総合的な相談に対応し、推測される課題や支援を検討する力のある支援者の素地づくりにつながっていくと考える。また、多様な専門支援スタッフとの関わり、話し合いの中で活動した経験は、他職種理解につながり、今後、地域で必要な機関と円滑な連携をしていく力のある支援者の素地づくりにもなっていくものとも考える。

コラボレーション企画で学び育った学生が、地域の支援機関や病院に配属され活躍されることとともに、地域の力を醸成していけるリーダーに育っていくことを切に願っている。

## 8. ソーシャルワーク演習教育におけるコラボレーションの意義

ソーシャルワーク演習教育におけるコラボレーションの意義については、第1に、学生が、高次脳機能障害支援という実際的な地域課題を認識し、その支援のためのグループワークスキルを、身につけることができることである。学生は大学で座学としては、ソーシャルワークの対象者理解等の学びをしているが、あくまでもイメージとしての理解である。演習では、現実にソーシャルワーク支援を必要としている対象者が、日常では気付かないところで存在していることを体験的に理解することができる。また、作業療法士として高次脳機能障害についての専門的知識に加えて、3年間の「やまぐちリハビリの会」の運営を担って来られた専門職からの直接的な指導を一貫して受けることは、学生にとって、グループワークのより実際の専門的なスキルを習得するこの上ない機会である。

第2に、学生が、授業という義務的体験を超え

て、継続的に支援事業を担う一員として地域貢献するという自主的活動への契機となることである。今どきの学生は、現代学生気質として、ボランティア活動やサークル活動といった自主的組織での活動は、苦手意識がある。社会福祉を学び、将来、社会福祉士として就労を希望している学生においても例外ではない。しかし、これらの学生が、利用者や関係者とのコミュニケーション能力やリーダーシップ、フェローシップ、あるいはコーディネート力等に欠けているのかというと、そうとも言えない。つまり、導入としてのしかけや機会を設定すれば、その潜在能力は発揮できると評価しており、若者の可能性を期待するからである。授業という半強制的な経験の機会を得て、自らの力や役割に気づき、その力を発展させる可能性を自らが開いていくことができる学生が育ってくることに期待したいと考えているからであり、それこそが教育の課題でもあると認識している。

第3に、第2の意義とも重なるものであるが、学生という社会的には未成熟な立場であっても、専門職にはない支援者としての力を、学生自らが発見できることである。学生が参加することは、「やまぐちリハビリの会」に関わる専門職の方々が評価しているように、当事者の方々の表情や態度が、明るく活発になり、石原氏の言葉を借りれば、『「してもらおう」から『してあげる』の役割が自然に担える場』の提供に繋がっていたといえる。会の終了時に、スタッフが会場を片付ける際に、当事者メンバー数人が一緒に手伝っている様子が印象に残った。スタッフによると、今までにない当事者の成長であるとのことであった。学生達は、学生という立場で、少しでも当事者や会の運営に役に立つことがあるということを手評価できたことで、今後の大学生活の自主的な活動へのモチベーションを高める効果があったといえる。

## 9. ソーシャルワーク演習教育におけるコラボレーションについての評価

ソーシャルワーク演習教育におけるコラボレーションについての評価は、演習終了後に振り返り

目的で学生へのアンケート調査を行ったので、その結果から考察する。アンケートは無記名で、アンケート項目は以下の項目である。

### 1) アンケート項目

#### (1) 事前準備指導について

- ①勉強になった（その理由）
- ②プログラム実施に当たって、役に立った（その理由）

#### (2) 企画演習プログラム実施について（該当するもの全てに○）

- ①自分たちでプログラムを実施するのは難しかった
- ②専門職の方達が支援してくださったので、安心感があった
- ③専門職の人達と一緒に実施するのに抵抗があった
- ④他大学等の学生と一緒に活動できたのは学びや活動内容が深まった
- ⑤他大学等の学生と一緒に活動するのは、気を遣うことが多く負担だった
- ⑥県立大学の先輩達がいたので、安心感があった
- ⑦その他自由記載

#### (3) 全体を通して（該当するもの全てに○）

- ①高次脳機能障害についての地域課題が理解できた
- ②高次脳機能障害について、理解が深まった
- ③利用者との関わりに、抵抗がなくなった
- ④利用者との関わりに抵抗があった
- ⑤リーダーシップやフェローシップが養われた
- ⑥グループの中での自分の役割など、自己覚知ができた
- ⑦企画力が身に付いた
- ⑧その他自由記載

#### (4) 今後の活動継続について

- ①これからも、「やまぐちリハビリの会」に参加したい
- ②継続的な参加は考えていないが、高次脳機能障害には関心を持っていきたい

## 2) 結果及び考察

### (1) 事前準備指導について

企画プログラムを実施する前に、事前準備指導を受けたことについては、14名全員が、とても深い学びになったと回答しており、以下に自由記載内容の一部を記す。学生が気付かなかったことについて、専門職員から指摘や指導を受けることによって、当事者理解やグループワークにおける重要なポイントや必要な配慮について、新たな学びにつながったとみられる。

〈自由記載内容〉

#### ①勉強になったこと

- ・自分たちは知らない知識（脳のはたらき等）を得ることができた。
- ・少人数で学ぶことで、より知識を詳しく吸収することができた。
- ・私たちが考えたゲーム内容は、自分たちなりにもよく練って考えたものだったので、自信があるように思っていたけど、他者や専門職の方の目線から見られた時に、想像して無かったような問題点を見つけてもらえたので助かったし、そんな見方もあるのかと思えることが多かったので勉強になった。
- ・実際に当事者の方と触れ合うことで、障害というものの見方が変わった。障害というのは、人それぞれだし、個人、個人が個性を持っているのがわかった。
- ・実際に利用者に関わったことのある方々だったので、見る力というか気持ちを読み取る力はすごいと思った。
- ・自分たちでは気が付かない点を指摘していただけたので、よりゲームが充実したものになったと思った。
- ・自分たち学生が気付いていないような注意点やどうしたらわかりやすいかなど、とても勉強になった。
- ・自分たちでは発見できなかった問題点を指摘してくださったので、新しい発見ができた。
- ・自分たちの視点のみではなく、指導者やボランティアの方の指導を受け、様々な角度からの視

点で考えることができた。

- ・実際に当事者のかたと関わっている方に指導していただいたので、当事者目線での意見も聞くことができ、どこを修正したら良いかなど、私たちが気付けない部分にも気付くことができた。
- ②プログラム実施に当たって、役に立ったこと
  - ・企画を一からすることの大変さを感じた。だが、この企画をしたことで、利用者理解の大切さを知ることができ、今後役に立つと思った。
  - ・経験のあるスタッフからの指導は、私たち学生が見落としていたポイントを指摘してくれたりと、具体的に例を挙げて教えてくれたので、分かりやすかった。
  - ・利用者の方と実際に関わることで身につくコミュニケーション能力、支援の仕方など理解できた。
  - ・説明の仕方、進行の仕方など、細かく決めることと、多くの専門職やボランティアの存在が重要だと分かった。
  - ・一つの物事を考えて完成させる中で、視点を変えてみたり、様々なことに目を配らなければならないという考え方を養うことに役だった。また他者との話し合いの大切さもよくわかった。
  - ・知識を得ることができたため、脳のはたらきを意識して、ゲームを考えることができた。また、単にゲームをするだけでなく、集中力等の問題点に考慮しながらプログラムを作ることができた。

### (2) 企画演習プログラム実施について

表3は、学生が、自分たちで「やまぐちリハビリの会」の運営を行ったことについての回答結果である。グループワークを運営することは、容易ではないことを自覚するとともに、専門職や先輩からのサポートがあることでの安心感を得る経験をしている。また、他大学等の学生と一緒に活動することは、ソーシャルワークの視点以外の多様な視点を学ぶ機会となった。これらの内容は、他のプログラム企画演習グループと比較して特色と

なることであり、貴重な経験の機会の提供であると評価できる。

表3 企画プログラム実施について n=14

自分たちでプログラムを実施するのは難しかった	10
専門職の方達が支援してくださったので、安心感があつた	13
専門職の人達と一緒に実施するのに抵抗があつた	0
他大学等の学生と一緒に活動できたのは、学びや活動内容が深まった	11
他大学等の学生と一緒に活動するのは、気を遣うことが多く負担だった	0
県立大学の先輩達がいたので、安心感があつた	12

### (3) 企画演習授業全体を通して

表4は、企画演習授業全体を通しての評価についての回答結果である。高次脳機能障害についての理解が深まったことについては、行政課題である高次脳機能障害支援事業の普及啓発について、学生の関心を高めることができたことにつながり、コラボレーションの目標としては、達成できたと評価できる。また、利用者との関わりや企画力、グループワークにおける自己の役割認識等においては、演習教育の目標として個々の達成が図られたと評価している。

表4 全体を通して n=14

高次脳機能障害についての地域課題が理解できた	5
高次脳機能障害について、理解が深まった	14
利用者との関わりに、抵抗がなくなった	12
利用者との関わりに抵抗があつた	1
リーダーシップやフェロシップが養われた	4
グループの中での自分の役割など、自己覚知ができた	10
企画力が身に付いた	14

### (4) 今後の活動継続について

「これからも、「やまぐちリハビリの会」に参加したい」と答えた学生は、8名で、「継続的な参加は考えていないが、高次脳機能障害には関心を

持っていきたい」と答えた学生は6名であった。参加学生の半数以上が今後の活動継続を希望していることは、大学教育課題と地方行政課題の一致した目標のもとに実現できたコラボレーションという新しい教育の形の効果が、検証されたものであると評価できる。言い換えれば、コラボレーションの意義が、結果的に期待以上の教育的効果をもたらすという、指導者にとっても挑戦的かつ実践的な演習教育であったといえる。

### おわりに

社会福祉士や精神保健福祉士養成においては、医療や社会福祉現場から、より実践力のある学生を育てるよう期待されているため、演習教育や実習教育の充実がますます求められている。一方では、現代若者気質として見られる学生の自主性やコミュニケーション力の低下が、教育現場を悩ませている。このような中で、このコラボレーションが、学生の自主的活動の導入となり、引いては学生が地域貢献として展開できる演習教育のモデルとなることを期待し、今後も継続し、発展させたいと考えている。

最後に、本コラボレーションについては、直接実施する山口県身体障害者福祉センターの評価はもとより、高次脳機能障害支援普及事業を担っている主管課の山口県障害者支援課も、2011年度に履修した3年生の数名が、継続して「やまぐちリハビリの会」やその他の研修事業等の普及啓発事業にスタッフとして活動していることについて、大いなる期待と評価を寄せていることを特筆しておきたい。

### 引用文献

- 社団法人日本社会福祉教育学校連盟・社団法人日本社会福祉士養成校協会・日本精神保健福祉士養成校協会 (2008) 「社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士の新たなカリキュラムの作成に向けて 説明会資料」  
 山口県立大学社会福祉学部 (2012) 「ソーシャルワーク実習ハンドブック」